The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「字鏡集」所載「四声綱目」について
Author(s)	伊藤, 智弘
Citation	語文. 2022, 118, p. 96-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95240
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「字鏡集」所載「四声綱目」について

伊　藤　智　弘

1 はじめに

鎌倉時代成立とされる漢字字書「字鏡集」諸本には、「四声綱目」と呼ばれる韻目整理図表が附載されている。この図表について先行論では、承澄撰『反音抄』所載図である「四声韻綱目」の借用という程度の指摘しかなされておらず、詳細な研究が行われていない。そこで本稿は『反音抄』所載図と「字鏡集」所載図との対照を主としながら、「字鏡集」所載「四声綱目」の性格を明らかにすることを試みる。

2「字鏡集」概要

「字鏡集」は、鎌倉時代成立とされる部首分類・単字掲出型漢字字書である。撰者に擬せられる人物としては、応永本に「為長卿作」として名前が現れる菅原為長、また寛元本識語に名前が見える天台僧・承澄の二者があるが、どちらにも決定的な証拠はない。内容としては、3 万字を超える掲出字に和訓・カナ音注・韻目・異体字といった情報を示しており、改編本系『類聚名義抄』や『大広益会玉篇』といった先行字書、また「切韻」系韻書を主要な素材として編纂されている。また、掲出字配列構造が、もともとは韻目順配列（音引き）であったものが、類似字形配列（字形引き）に改編されたことが明らかにされている。

「字鏡集」現存諸本は、掲出字配列構造の改編を境界として、大きく 2 つの系統に分けることができる。1 つは、原初的な形態（韻目順配列組織）を残す「天文本[(1)]」と、天文本と同形態の本を元として派生した20巻本[(2)]諸本であり、この系統に属する諸本を「天文本系統」と呼ぶことができる。もう一つが、全編が類似字形配列組織へと改編された「永正本系統」で、このうち最も早い段階の形態を留める「永正本[(3)]」、永正本の形態を元とした 7 巻本[(4)]諸本がこれに属する。

3「四声綱目」の検討

3.1「四声綱目」概要

「四声綱目」は、「字鏡集」巻末（あるいは巻首[5]）に附された韻目整理図表である。この図表は「字鏡集」のオリジナルではなく、承澄撰の『反音抄[6]』所載「四声韻綱目」（以下、便宜上「韻綱目」とする）という図表の引用であると考えられている。なお以下、「字鏡集」所載図を「綱目」と呼び、特に断らない場合は天文本所載図を用いる。ただし、天文/永正本系統の区別が必要な場合は天文本所載図を「綱目（天文）」、永正本所載図を「綱目（永正）」として用いる[7]。

「韻綱目」は、切韻系韻書（『広韻』）の韻目を、四声に対応した 4 段に整理・配列した図表である（稿末資料も参照）。その構成原理は大きく 2 つある。一つは、声調を除いた韻母を同じくする平上去声の韻を、またそれらが陽声韻（鼻音韻尾）である場合にはさらに、韻尾の調音点を同じくする入声韻を対応させる「四声相配」の原理に基づき（この原理で対応している韻を本稿は「相配韻」と呼ぶ）、各段に相配韻を配置するという原理である。もう一つが、『広韻』の「同用」、すなわち互いに押韻可能な隣接韻を纏める規定に従い、同用韻を同行に配するという原理である。これらの構成原理に基づき、例えば同用関係にある「先」「仙」韻とその相配韻が、同一行の第 1 段目～第 4 段目に「先仙（センセン）－銑獮（センセン）－霰線（センセン）－屑薛（セツセツ）」と配されることとなる[8]。韻目それぞれにはカナで音が示されており[9]、これは「日本漢字音の整理をなしたものとして重視」できる（馬淵1965）という（紙面の都合上、以降は本文中にカナ音注を示すことはしない）。

この図の由来や後代への影響関係については、馬淵（1965）が「承澄の独創であること」「弟子である信範が『韻鏡』を直ちに理解する要因となったこと」を指摘する。またこの見解を承け、貞苅（1967）は「字鏡集」の「綱目」について、「ほかにこのような表を作ったものがないとすれば承澄の作から借用に及んだと考えるほかない」と述べる。

「綱目」が「韻綱目」を基とすることは、以下に述べる種々の特徴からも確実といってよい。しかしまた、単なる「韻綱目」の「借用」ではない、ということもまた確かめることができる。

3.2 注記の特徴

「韻綱目」の各韻には、「［喉内空］東－董－送/冬鍾－腫－宋用/江－講－絳［已上三

聲喉空］」「［喉内炎］屋/沃燭/覚［已上喉涅槃］」などといった注記が施されている。漢字音の鼻音韻尾 -m,-n,-ng 及び入声韻尾 -p,-t,-k に関連付けられる「空点」「炎点（涅槃点）」、喉舌唇の「三内」が見えることから、韻尾を基準とした韻目分類のようである（ただし、厳密にはそうなっていない部分もある）。以下に、注記と注記対象となる韻尾の対応を整理し、仮に a~c の 3 型に分類して示す。

	-u・-ng	-n	-m	-k	-t	-p	-i・無韻尾
a型	喉内空	舌内空	脣内空	喉内炎	舌内炎	脣内炎	—
b型	喉空	舌空	脣空	喉炎/喉涅槃	舌炎	脣炎	—
c型	—	—	—	—	—	—	喉/脣/舌

b型注記はa型（～内空/炎）から形式上「内」を省略したもので、a、b型は事実上同種の注記である。[10] a、b型と異質なのはc型注記で、無韻尾あるいは -i 韻尾の韻目を対象とし、それゆえ「喉/炎」への関連付けがない注記である。

a、b 型注記には「喉（内）空」の注記対象について問題がある。「［喉空］蕭宵-篠小-嘯笑/肴-巧-效/豪-皓-号［已上喉空］」、「［喉空］蒸登-拯等-證嶝/尤侯幽-有厚黝-宥候幼［已上喉空］」の 2 か所において、-u 韻尾である效・流摂の「蕭」「宵」「肴」「豪」「尤」「侯」「幽」韻（及び相配韻）が「喉内空点」の範囲に含まれている。通常、空点は -n・-m・-ng の鼻音韻尾に関連付けられるため、これらは異例である。

『反音抄』において、韻目と空・炎（涅槃）点及び三内分類の関係は「**韻綱目**」だけに見えるものではない。承澄は「又以真旦唐韻五十韻頭於天竺悉曇十二韻頭皆悉摂盡更無違餘」として、「唐韻」の韻目と「悉曇十二韻頭」を対応づけるが、[11] [12] この記述において、問題になっている -u 韻尾諸韻（下線部）は喉内空点（下波線部）の範疇に含まれない（下記は関係する部分のみの抜粋。アルファベット部分は梵字の転写、括弧内は傍書）。

o汙（ヲ）　蕭宵尤侯幽
au奥（アウ）　肴豪
aṁ暗（アム）三内在之
喉（－ウ）　東冬鍾江陽唐庚耕清青蒸登　已上喉内
舌（－ン）　真諄臻文欣元魂痕寒桓刪山先仙　已上舌内
脣（－ム）　侵覃談監添咸銜厳凡　已上脣内
aḥ悪（アク）三内在之

喉（－ク－キ）　屋沃燭覚薬鐸陌麥昔[13]　已上喉内
舌（－チ－ツ）　質術櫛物迄月没曷末黠鎋屑薛　已上舌内
脣（フ）　緝合盍葉怙洽狎業乏　已上脣内

もっとも、上記は安然『悉曇蔵』からの引用を基にした記述であるから（脚注12参照）、必ずしも承澄自身の認識とは一致していないかもしれない。この問題については後述する。

c型注記は、鼻音・入声韻尾の三内分類ができない（無韻尾・-i韻尾）場合の注記だが、概ね止・蟹摂を「舌」、果摂を「喉」、仮・遇摂を「脣」に分類したようである。以下がc型の全例である（カナ音注は省略）。

［舌］支脂之－紙旨止－寘至志［已上舌］
［脣］微－尾－未/魚－語－御/虞模－麌姥－遇暮［已上脣］
［舌］齊－薺－霽祭/佳皆－解駭－泰卦怪夬/灰咍－賄海－隊代廢［已上舌］
［喉］歌戈－哿果－箇過［已上喉］
［脣］麻－馬－禡［已上脣］

疑問となるのは、止摂の中でも「微尾未」韻のみが遇摂の韻と纏められて「脣」とされること、性質の近しい果・仮摂が纏められずにそれぞれ「喉」「脣」に分配されることである。

止摂「微尾未」・仮摂「麻馬禡」を見ると、韻目用字の声母（頭子音）が脣音字である場合には「脣」とされるようである（「廢」韻は相配韻を持たない点で同列に扱えないので措く）。したがってc型注記は、陰声韻について「円脣性をもつ母音が韻母である韻、及び韻目用字が脣音声母字である韻」を「脣」とし、残る「イ段音、あるいは「―イ」音となる韻」を「舌」、「ア段音となる韻」を「喉」、と分類していることになる[14]。

a～cいずれにも含め難い特異な注記が「［舌喉］青－迥－徑［已上舌喉］」である。「青迥徑」韻が本来-ng韻尾すなわち「喉内空点」であることから、本来は「喉（内）空」が期待されるところである。この問題についても後述する。

では「綱目」において、これらの注記はどうなっているのか。「綱目」では、「韻綱目」でa・b型の注記は、すべて「［～内］…［已上～］」に統一されている[15]。c型注記はまったく現れない。例えば「［喉内炎］屋…覚［已上喉涅槃］」→「［喉内］屋…覚［已上喉］」、「［舌内空］真諄臻…霰線［已上舌空］」→「［舌内］真諄臻…霰線

［已上舌］」、「［舌］支脂之」→「支脂之」、「［脣］麻」→「麻」といった具合である。なお注記対象はほぼ「韻綱目」そのままであり、先に問題となった-u韻尾諸韻目についても同様に「［喉内］蕭宵-［喉内］篠小-［喉内］嘯笑」となっていて、「韻綱目」の問題をそのまま引き継いでいる。[16]

総じて「綱目」は、「韻綱目」から注記を引き継いではいるものの、その引き継ぎ方は選択的なものになっている。a、b型における空点・炎点との関連付け、またc型注記はそれ自体が、引き継ぎの対象にならなかった。

引き継がれなかった両者の共通項として考えられるのは、どちらも三内説を「より派生的な内容と関連づけた」ものだということである。もともと三内説は、漢字音韻尾、すなわち日本語に存在しない閉音節を発音しなければならない漢字音学習の場において生じたものと考えられる（馬淵1983）。しかし、空点・炎点は漢字音の分類というより、漢字音と悉曇学理論との関連づけであるし、開音節である無・-i韻尾にまで及ぶ三内分類は、字音学習の実用性からは離れた分類といえる。

すなわち「綱目」が必要としていたのは、空点・炎点との関連付けやc型注記のような派生的な三内説の適用ではなく、あくまでも「漢字音の鼻音・入声韻尾を三内に分類すること」であったと考えられる。それゆえ、注記の引継ぎ方は選択的なものになったのである。

ところで、「韻綱目」で效・流摂韻目に「喉空」が施されたのは何故だろうか。

日本悉曇学において空点は、漢字音の三種の鼻音韻尾と結びつけられて、㋐ウ＝喉内空点、㋐ン＝舌内空点、㋐ム＝脣内空点、というパターン化した理解が行われていた（肥爪1996）。「韻綱目」も同様で、「―ウ＝喉内空点」「―ン＝舌内空点」「―ム＝脣内空点」で対応している。しかし、このパターンがカナ表記から一般化されると、-u韻尾である效・流摂韻の「―ウ」表記に対しても、「－ウであるから」喉内空点・-ng韻尾である、という理解を可能にしてしまう。このことが、效・流摂韻に喉内空点の注記が施されるに至った要因であるだろう。

「青迥徑」韻の特異な注記「舌喉」も、背景には同様の問題が存するだろう。当該韻は本来-ng韻尾相当だが、音注は「㋓イ」表記をとるため、鼻音韻尾ではなく-i韻尾に相当するように見える。[17]そのため、a、b型とc型双方に跨るような注記（「舌」且つ「喉（内空）」）となったのではないか（ただしこの場合、承澄が梗摂「㋓イ」の鼻音性を、一応知識としては保持していた、と考える必要がある。「㋓イ」の鼻音性は、むしろ「―ウ」よりも早く忘れられてしまったという（肥爪1996）から、この点に解釈上の疑問点を残す）。

要するに「韻綱目」には、承澄の漢字音理解がほぼ「カナ表記を介したものであった」ことが反映している、ということになる。[18]

3.3 カナ音注における変更点

「韻綱目」のカナ音は、全てが実際に行われていたものではなく、中には必ずしも現実に合致しない「理論的な整理」による音形が混在していることが馬淵（1965）によって指摘されている。例えば「諄」「術」韻の「スキン」や「スキツ」[19]、「諍」韻の「セイ」などである。一方で、こうした「理論的な音」は「綱目」では殆どが現れなくなっている。以下、「韻綱目」→「綱目」でその変更を示す。

・隊韻…ツワイ,タイ　→　タイ
・諄準稕韻…シユン,スキン　→　シユン[20]
・術韻…シユツ,スキツ　→　シユツ[21]
・末韻…フワツ,ハツ　→　ハツ
・陽韻…イヤウ,ヤウ　→　ヤウ
・薬韻…イヤク,ヤク　→　ヤク
・清韻…サウ,セイ　→　セイ

「綱目」では、理論的・分析的なカナ音注を引き継がず、「より実態に即したカナ音注を（こそ）示す」という方針に変わっていると捉えられる。[22]

3.2で見た注記における派生的な三内説適用から、また、本節で見た理論的カナ音注の排除という状況から、次のように言うことができる。

「綱目」は、「韻綱目」から「派生的なもの」「（実態に必ずしも合わない）理論的なもの」という要素を排除した、いわば簡易バージョンだと捉えられる。このことは、「韻綱目」「綱目」が、想定された利用者層を異にする図表であることを意味する。「韻綱目」は、派生的・専門的なことまで含めた詳細な内容を必要とする利用者を、「綱目」は、細かなことには踏み入らず、必要最低限の整理・分類を施した内容を必要とする利用者を想定している、と考えられる。

3.4「綱目」のアップデート

「綱目」は「韻綱目」を簡易化したバージョンではあるが、その一方で「綱目」には「韻綱目」には行われていない、独自の改変も施されている。それが「綱目（天文）」→「綱目（永正）」間で行われた、韻目の配列組織に対する修正である。[23]

図 1 に、「韻綱目」「綱目（天文）」と「綱目（永正）」の図表末尾を対照した（「或」は注記[24]。カナ音注、韻尾への注記は省略）。「韻綱目」「綱目（天文）」は韻目の配置において同形なので、ここでは区別しない。

嚴凡	咸銜	鹽添
儼范	豏檻	琰忝
釅梵	陷鑑	艶椽
業乏	洽狎	葉帖

嚴凡	咸銜	鹽添
	豏檻范或	琰忝儼或
釅梵	陷鑑	艶椽
業乏	洽狎	葉帖

図 1 左が「綱目（永正）」、右が「韻綱目」「綱目（天文）」

「韻綱目」去声段（3 段目）の問題については小西（1948）の指摘がある。「韻綱目」で韻の並びは「豔椽/陷鑑/釅梵」であるが、『広韻』の次第では「豔椽釅陷鑑梵」になっており、「承澄の韻目は文字において広韻に同じく、順序については『刊謬補闕切韻』（稿者注※豔椽證嶝陷鑑嚴梵）に合う」。すなわち、「承澄は広韻を基礎とし、唐代の切韻によって修正した」ということになる[25]。

しかし別の面からは、この「唐代の切韻」による修正は不徹底に終わっているとも言える。「韻綱目」「綱目（天文）」の上声段は「琰忝儼 / 豏檻范」、すなわち『広韻』における韻目の並び（琰忝儼豏檻范）と同用関係（「琰忝儼」「豏檻范」がそれぞれ同用）に従って配されているが、それゆえ「儼」「范」韻の配置が、相配する平去入声の韻目と対応しない[26]。『王三』など、唐代「切韻」の該当部分は「琰忝拯等豏檻广范」（「广」は「儼」に相当）の次第であるから、唐代の切韻を利用したなら、去声韻のように次第を「琰忝/豏檻/儼范」に修正し、相配韻の対応を整えることは可能であったように思われる。承澄が依拠した「切韻」は、上声の該当部分を欠いていたのだろうか。

一方で図 1 左側に掲げた「綱目（永正）」を見ると、「唐代切韻を見ていれば可能であった」修正が行われたと思しく、「琰忝 / 豏檻 / 儼范」の次第に変更されている。すなわち、不徹底に終わっていた唐代切韻に基づく修正が、「綱目（永正）」に至って徹底されたのである。

こうした韻目整理の修正は他にも見られる（図 2）。「韻綱目」「綱目（天文）」では、『広韻』で独用である去声「問」「焮」、『広韻』で同用だが図表では独立させられた平声「文」「欣」[27]がそれぞれ別行に配されるのに対し、上声のみ『広韻』の同用関係に従って「吻隱」が一行に纏められており、図表上では「欣」「焮」「迄」の相配韻を欠くことになる。これが「綱目（永正）」では、「隱」が独立して次行に配置を修正され[28]、相配韻の対応が整えられている[29]。

殷欣ィ	文
隱	吻
焮	問
迄	物

欣	文
	吻隱或
焮	問
迄	物

図 2 左「綱目（永正）」、右「韻綱目」「綱目（天文）」

既述のように「韻綱目」において、唐代「切韻」を利用した韻目整理の修正は、不徹底に終わっており、「綱

目（天文）」はその状態を引き継いでいた。これに対し「綱目（永正）」は、唐代切韻の利用・韻目整理の修正が更に徹底され、より適切な韻目配置に改められている。このことから、「綱目（永正）」は「綱目（天文）」の、いわばアップデート版であると位置づけることができる。

ここまで「**韻綱目**」「綱目」の関係を見てきたが、「綱目」の作成や、「綱目（天文）」から「綱目（永正）」への改変を誰が・いつ・なぜ行ったのか、これは現状不明である。図表の構成原理を理解していた人物の手によることは間違いなく、その意味でオリジナルの作成者である承澄は有力な候補者ではあるが、断定することはできない[30]。この図表が「字鏡集」に附載されているという事実も踏まえながら検討していくべき問題である。

4 おわりに：「字鏡集」はなぜ「綱目」を附載したのか

本稿では「綱目」について、オリジナルである「**韻綱目**」と対照しながら検討し、「綱目」が「**韻綱目**」のいわば簡易化バージョンであること、また「綱目（永正）」において、韻目整理のアップデートが行われたことを見た。今後はこの検討を基に、「字鏡集」が「綱目」を附載したことの意味を改めて考えてみる必要があるように思われる。その際、「カナ音注」が重要な視点を提供するように思われる。

「字鏡集」は、本邦字書にはそれまでになかった「カナ音注の網羅表示」という設計思想を実現し（ようとし）た字書であるが（伊藤 2020）、カナ音注を意識的に扱う態度は、「**韻綱目**」から「綱目」への改変においても「より実態に即したカナ音注提示への転換」として現れていた。すなわち、「綱目」と「字鏡集」は、文献としての性格は違っても、「カナによる漢字音の把握」を重要視する（というよりも、それを自明視する）という、日本化した漢字音認識を共通の基盤として成立している。このことはまた、韻目への網羅的カナ音注表示をはじめに行った「**韻綱目**」も同様だと言い得るかもしれない。空点注記に「カナ音注に牽かれた」ためと思われる誤りが見られたことも、示唆的である。

「字鏡集」が「綱目」を附載した理由については、韻目順配列であった初原本「字鏡集」を利用する際に必要な、韻目とその順序の「備忘のために附された」というのが山田（1967）以来の解釈である。しかし本稿の検討からすると、こうした見方は少し単純に過ぎるようにも思われる。「綱目」は単なる韻目一覧表以上のものであるし、「字鏡集」と共通した字音意識に立脚したものである。これをわざわざ附載することには、「備忘のための韻目一覧表」よりも積極的な意義を見出すことが出来るのではないだろうか。

注

（1）尊経閣文庫所蔵。天文年間の識語が見えることから天文本と呼ばれる。

（2）尊経閣文庫所蔵の「応永本（応永年間の識語より）」、国立国会図書館所蔵の「白河本（該本の所蔵者、白河楽翁すなわち松平定信より）」及び「塙本（塙保己一識語より）」、のほか、現存する「字鏡集」の多くはこの系統に属するものである。

（3）尊経閣文庫所蔵。永正年間の識語が見えることから永正本と呼ばれる。

（4）国立国会図書館所蔵の「寛元本（寛元年間の識語が見えることより。狩谷棭斎旧蔵本）」、「龍大本（所蔵の龍谷大学より）」などがある。

（5）天文本系統では巻末、永正本系統では巻首にある。この違いはひとまず問題としない。

（6）本稿は『影印注解悉曇学書選集』所収の徳治年間写本による。他の諸本に言及する場合、『選集』に示された馬淵氏の校合に基づくものである。

（7）「字鏡集」諸本での「綱目」の異同については、峰岸（2001）に詳細な記述がある。なお、永正本の「綱目」は、配列が4段でなくなっているなどの問題がある。そのため本稿でいう「綱目（永正）」は、寛元本・龍大本を参考に、適宜補正を施したものである。

（8）但し「泰」「廃」のように相配韻を持たない場合、同用関係になくとも隣接韻と同一行に纏められる。例えば「佳皆－解駭－泰卦怪夬」といった具合である。

（9）「綱目」はカナ音注の表示が網羅的ではないが、これは「平声韻目を基準として、同音形になる上去声はカナ音注を省いてよい」という方針によるものである。例えば「魚－語－御」では「魚」に「キヨ」と示すのみだが、語御韻も同様に「キヨ」であるから、省くことに問題はない（実際、「**韻綱目**」ではこれらにも「キヨ」とある）。

（10）例えば「［舌内空］真諄臻…霰線［已上舌空］」の事例に見えるように、「内」の違いは分類範疇の違いに関与しない。一応、「已上…」のように注記の適用範囲の終端を示す際にはb型しか現れない、という程度の差はあるようである。

（11）実際には『広韻』韻目である。大東急記念文庫蔵正安元年写本『反音抄』には「五十韻ハ依唐韻今付テ廣韻注五十七韻」との傍注が見える。

（12）馬淵（1965）は、『反音抄』のこの記述が、安然『悉曇蔵』が「又如真旦韻詮五十韻頭今於天竺悉曇十六韻頭皆悉摂盡更无遺餘」として『韻詮』「五十韻頭」と「悉曇十六韻頭」を対照した部分を、『広韻』韻目との対照に置き換え、更に独自に「いわゆる空点・涅槃点の二種において、さらに三内説によって細分し」たものであると指摘する。

（13）なお、この「喉（－ク－キ）」諸韻には「錫職徳」の脱落が考えられる。「**韻綱目**」には「［喉炎］薬鐸/陌麥昔/錫/職徳［已上喉炎］」とあり、こちらの注記は問題ない。

（14）承澄が「唇音声母の場合には韻母に円唇性が加わる」と把握していたと仮定すると、「唇」は「円唇性をもつ韻」のという分類となり、したがってc型注記は「陰声韻を韻母の形式によって分類した」注記と捉えることができる。またこのように考えると、c型注記の「喉」「舌」「唇」は、『反音抄』所載の五音図における「口（ア段）」「舌（イ段）」「唇（ウ段）」と併行した分類であるとも捉えることができそうである。

（15）ただし「綱目（永正）」では、図表末尾のみ「厳凡［已上<u>脣内</u>］－儼范［已上<u>脣内</u>］－釅梵［已上<u>脣内</u>］－業乏［已上<u>脣内</u>］」となっている。

（16）ただし現存諸本は「［喉内］蕭宵－［喉内］篠小－［喉内］嘯笑/肴－巧－效/豪－皓－号/歌戈－哿果－箇過…」で「已上喉」を欠き、形式上はどこまで「喉内」の適用範囲な

のかが示されない。

(17)「―イ表記に牽かれた」という議論には「清（カナ表記は「セイ」）」韻も該当するように見えるが、こちらは「喉空」に含まれており、問題はない（[喉空] 陽唐－養蕩－漾宕/庚耕遺－梗耿静－敬諍勁 [已上喉空]。なお「[已上喉空]」は観智院金剛蔵蔵文和五年写本より補った）。これは、『広韻』で独用の「青」韻と異なり、「清」が「庚耕（ともに -ng 韻尾、カナ音注カウ）」と同用韻であることに支えられた理解と考えられる。

(18) 注記とその誤りについて、「承澄によるものではない」とも捉えられる。しかし、この注記は複数の『反音抄』諸本に共通して見られるものであるし、「綱目」に継承されていることからして、『反音抄』成立（1232 年）からそれほど隔たらない時期に施されたものと考えられる（寛元本識語を信用すれば、1245 年以前のことである）。そのため、注記はオリジナルの本か、或いはそれに近い写本で既に現れていたと考えられる。この事情を考慮して本稿では「注記は承澄の付したもの」として扱っている。

(19)「スキ－」形は、臻摂合口歯音字が「シユ－」形に定着する以前の段階で漢音（の表記）形として実際に使用されており、実例も種々指摘されている。とはいえ、当該字音が鎌倉時代以降「シユ－」形に統一されていくという趨勢からすると、「綱目」作成時期においても、「スキ－」形は合口性をより意識的に反映させた形と把握されていたと考えることができ、「理論的な整理」によるものと同質と捉えられる。「スキ―」が一部の知識階層における字音学習の反映に過ぎないということは、佐々木（2004）などにも指摘がある。

(20) 準韻は「シン」も示す。ただし、これは同用韻「軫」に牽引された誤りであろう。応永本ではこの「シン」は削除されている。なお「軫」は「シユン」になっているが、これは「準」への目移りによる誤りだろう。龍大本や寛元本では「シン」に訂正されている。

(21) 実際には、「シツ」に「ユ」が傍書されているような書き方であって、「シユツ」「シツ」どちらか判然としない。とはいえ、「スキツ」削除の事実は変わらない。

(22) 佳・怪韻は少し事情が違い、前者は「**韻綱目**」「カ」→「綱目」「カ,ケイ」、後者は「カイ」→「カイ,クワイ」。「怪」は合口字のため、「クワイ」は「実態に即した」音形提示の一環とみることができる。「佳」の「ケイ」は不審だが、相配韻「解」が「**韻綱目**」で「カ,カイ」であったことを考慮すると、「カイ」の誤写と見るのが穏当か。

(23) また、「綱目（永正）」末尾には、三内分類とカナ音形の対応整理が追加されており、「空点三内」として「ウ喉」「ン舌」「ム脣」が、「涅槃点三内」として「クキ喉」「ツチ舌」「フ脣」が示されている。これは『反音抄』の記述をもとにしたものだろう。

(24) 小西氏は「或」注記のある韻について、唐代「切韻」においては違う字が韻目として立てられていることなどを受けて「みな問題のある韻である」と指摘するが、結局のところ「或」が何を意味するのかについては、明確な言及がない。稿者は今のところ、次のように考えている。承澄は当該諸韻について、実際には別行に配するのが適切ではないかと考えていたが、唐代「切韻」のような徴証を得ておらず、配置の確定には至っていなかった。そこで、暫定的には『広韻』の同用関係に従って韻を配置しておき、別行の可能性が存することを、「或」という注記によって示したのである。

(25) 韻目の「修正」は他の箇所にも見え、『広韻』の「映」韻に当る韻目は「敬」に、また

『広韻』「蟹」韻は「解」になっている。なお小西氏は「宵」韻が「霄」となっていることも挙げているが、徳治写本で該字は「宵」である。氏の記述は「真福寺本（嘉元元年写本）」によるものだが、どちらが本来的な記述であるかは決め難い。

(26) 峰岸（2001）は「綱目（天文）」のこの事実について、韻順を「誤る」としているが、『広韻』に従っただけであるから、「誤り」とまで言う必要はないだろう。

(27)「綱目（永正）」で「殷」になっているが、これは唐代切韻での韻目である。

(28) ただし、この修正に唐代切韻が（どう）関わったかは一考を要する。『広韻』のような同用規定が設けられていない韻書は「隠」独立の一根拠になり得るが、韻の順序そのものは、唐代切韻も「…吻隠…（『王二』では「吻謹」）」で『広韻』と変わりがない。

(29) 大東急記念文庫蔵正安元年写本『反音抄』では「隠」が「欣」行に配され「イ本無之」と注されている他、「**韻綱目**」を引用したと思しい了尊『悉曇輪略図抄』所載図では「殷－隠－欣－迄」となっている。この部分に関しては、「綱目」でなくとも、アップデートが行われる場合があったようである。

(30)「**韻綱目**」でも果たされていなかった「或」注記韻の処理を実行したという点で、承澄が「綱目（永正）」への改変に関与した可能性は高そうに思われる。とはいえ、それを「「字鏡集」附載の図表」において行った理由を見出すことは難しく、なお検討を必要とする。

参考・引用文献

伊藤智弘（2020）「「字鏡集」の字音掲載方針について」『訓点語と訓点資料』145, 62-40, 訓点語学会

岡田希雄（1942）「寛元本字鏡集の識語」『歴史と国文学』26巻 6 号, 9-21, 太洋社

小西甚一（1948）『文鏡秘府論考　研究編上』大八洲出版

佐々木勇（2004）「日本漢音における止摂合口字音の受容に見られる位相差」『国語国文』73（7）, 21-37, 中央図書出版 →佐々木（2009）にて加筆修正。

佐々木勇（2009）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』汲古書院

貞苅伊徳（1967）「注文から見た字鏡鈔・字鏡集の考察」『本邦辞書史論叢』, 127-190, 三省堂

肥爪周二（1996）「日本漢字音における喉内鼻音韻尾の鼻音性」『山口明穂教授還暦記念国語学論集』, 244-263, 明治書院 →肥爪（2019）にて加筆修正。

肥爪周二（2019）『日本語音節構造史の研究』汲古書院

馬渕和夫（1965）『日本韻学史の研究Ⅰ』日本学術振興会

馬渕和夫（1983）「三内説について」『中川善教先生頌徳記念論集　仏教と分化』, 279-309, 同朋舎出版 →馬淵（1996）に収録。

馬渕和夫（1996）『国語史叢考』笠間書院

峰岸明（2001）「尊経閣文庫所蔵『字鏡集』二十巻本（応永本）解説」「尊経閣善本影印集成24　字鏡集 4」八木書店

山田忠雄（1967）「字鏡鈔と字鏡抄」『本邦辞書史論叢』, 1-126, 三省堂

参考・引用テキスト
「天文本」・『字鏡鈔天文本影印編』中田祝夫・林義男編　勉誠社（1982）
「永正本」・『字鏡抄』原装影印版古辞書叢刊　雄松堂書店（1974）
「寛元本」・国立国会図書館デジタルコレクション、請求記号「寄別 13-55」https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2592432（最終閲覧日 2022/03/09）
「龍大本」・龍谷大学貴重資料画像データベース、請求記号「021-44- 7 」http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/cont_05/pages_05/v_menu/0532.html?l= 0 &q=%E5%AD%97%E9%8F%A1%E9%9B%86（最終閲覧日 2022/03/09）
「応永本」・『尊経閣文庫所蔵『字鏡集』二十巻本』尊経閣善本影印集成 21 ～ 24　八木書店（1999 ～ 2001）
『影印注解悉曇学書選集　第一巻』馬淵和夫編　勉誠社（1985）
『影印注解悉曇学書選集　第三巻』馬淵和夫編　勉誠社（1989）
『影印注解悉曇学書選集　第四巻』馬淵和夫編　勉誠社（1989）
『校正宋本廣韻　附索引』藝文印書館（1970）
『十韻彙編』劉復等編著　臺灣学生書局（1963）
『唐五代韻書集存』周祖謨編　中華書局（1983）

付記

本稿は令和 3 年大阪大学国語国文学会（2021 年 1 月 9 日、zoom 開催）での口頭発表を基にしたものです。発表席上、またその他で多くの方々よりご意見・ご教示を賜り、それを参考に加筆・修正したものです。記して感謝申し上げます。なお本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号：21J10451）の助成を受けた研究成果の一部です。

「韻綱目」
（『影印注解悉曇学書選集』所収の徳治二年写本により、馬淵氏の校合に従って注記の補入等を行う）

	平	上	去	入
1 行	［喉内空］ 東トウ	董トウ	送ソウ	［喉内炎］ 屋ヲク
2 行	冬トウ 鍾シヨウ	腫シヨウ	宋ソウ 用イ,ヨウ ※イヨウ,ヨウか	沃ヲク 燭シヨク
3 行	江カウ	講カウ	絳カウ ［已上三声喉空］	覚カク ［已上喉涅槃］
4 行	［舌］ 支シ 脂シ 之シ	紙シ 旨シ 止シ	寘シ 至シ 志シ ［已上舌］	
5 行	［脣］ 微ヒ	尾ヒ	未ヒ	
6 行	魚キヨ	語キヨ	御キヨ	
7 行	虞ク 模ホ	麌ク 姥ホ	遇ク 暮ホ ［已上脣］	
8 行	［舌］ 齊セイ	薺セイ	霽セイ 祭セイ	
9 行	佳カ 皆カイ	解カイ,カ 駭カイ	泰タイ 卦カイ 怪カイ 夬カイ	
10行	灰クワイ 咍カイ,タイ異本	賄クワイ 海カイ	隊ツワ,タイ※ツワイ,タイか 代タイ 廢ハイ ［已上舌］	
11行	［舌内空］ 真シン 諄スヰン,シユン 臻シン	軫シン 準スヰン,シユン	震シン 稕スヰン.シユン	［舌内炎］ 質シツ 術スヰツ,シユツ 櫛シツ
12行	文フン	吻フン 隱イン［或］	問フン	物フツ
13行	欣キン		炘キン	迄キツ
14行	元クエン 魂コン 痕コン	阮クエン 混コン 很コン	願クエン 慁コン 恨コン	月クエツ 没ホツ
15行	寒カン 桓クワン	旱カン 緩クワン	翰カン 換クワン	曷カツ 末フワ,ハツ ※フワツ,ハツか
16行	刪サン 山サン	潸サン 産サン	諫カン 襇カン	黠カツ 鎋カツ
17行	先セン 仙セン	銑セン 獮セン	霰セン 線セン ［已上舌空］	屑セツ 薛セツ ［已上舌炎］
18行	［喉空］ 蕭セウ 宵セウ	篠セウ 小セウ	嘯セウ 笑セウ	
19行	肴カウ	巧カウ	效カウ	
20行	豪カウ	皓カウ	号カウ ［已上喉空］	
21行	［喉］ 歌カ 戈クワ	哿カ 果クワ	箇カ 過クワ ［已上喉］	
22行	［脣］ 麻ハ	馬ハ	禡ハ ［已上脣］	

23行	［喉空］ 陽イヤ,ヤウ ※イヤウ,ヤウか 唐タウ	養イヤ,ヤウ ※イヤウ,ヤウか 蕩タウ	漾イヤ,ヤウ ※イヤウ,ヤウか 宕タウ	［喉炎］ 薬イヤ,ヤク ※イヤク,ヤクか 鐸タク
24行	庚カウ 耕カウ 清セイ,サウ	梗カウ 耿カウ 静セイ,サウ	敬カウ 諍サウ,セイ 勁ケイ ［已上喉空］	陌ハク 麥ハク 昔セキ
25行	［舌喉］ 青セイ ※徳治写本「シヤウ」あり。朱筆か	迥ケイ	径ケイ ［已上舌喉］	錫セキ
26行	［喉空］ 蒸シヨウ 登トウ	拯シヨウ 等トウ	證シヨウ 嶝トウ	職シヨク 德トク ［已上喉炎］
27行	尤イウ 侯コウ 幽イウ	有イウ 厚コウ 黝イウ	宥イウ 候コウ 幼イウ ［已上喉空］	
28行	［脣内空］ 侵シム	寢シム	沁シム	［脣内炎］ 緝シフ
29行	覃タム 談タム	感カム 敢カム	勘カム 闞カム	合カフ 盍カフ
30行	鹽エム 添テム	琰エム 忝テム 儼ケム［或］	豔エム 桥テム	葉エフ 帖テフ
31行	咸カム 銜カム	豏ケム 檻ケム 范ハム［或］	陷カム 鑑カム	洽カフ 狎カフ
32行	嚴ケム 凡ハム		釅ケム 梵ハム ［已上脣空］	業ケフ 乏ハフ ［已上脣炎］

「綱（天文）」
（天文本をもとに、虫損箇所は補う）

	平 [喉内]	上 [喉内]	去 [喉内]	入 [喉内]
1 行	東	董トウ	送ソウ	屋ヲク
2 行	冬トウ 鍾シヨウ	腫シヨウ	宋ソウ 用イヨウ， ヨウ	沃ヲク 燭シヨク
3 行	江カウ [已上喉]	講カウ [已上喉]	絳カウ [已上喉]	覚カク [已上喉]
4 行	支シ 脂シ 之シ	紙 旨 止	寘 至 志	
5 行	微ヒ	尾	未	
6 行	魚キヨ	語	御	
7 行	虞ク 模ホ	麌 姥	遇 暮	
8 行	齊セイ	薺	霽 祭	
9 行	佳カ,ケイ 皆カイ	解 駭	泰 卦カイ 怪クワイ， カイ 夬カイ	
10行	灰クワイ 咍タイ	賄クワイ 海カイ	隊タイ 代タイ	
11行	[舌内] 真シン 諄シユン 臻シン	[舌内] 軫シユン 準シユン， シン	[舌内] 震シン 稕シユン	[舌内] 質シツ 術ユ，シツ ※シユツか 櫛シツ
12行	文フン	吻 隱イン	問	物フツ
13行	欣キン		焮キン	迄キツ
14行	元クエン 魂コン 痕コン	阮 混 很	願 慁 恨	月クエツ 没ホツ
15行	寒カン 桓クワン	旱 緩	翰 換	曷カツ 末ハツ
16行	刪サン 山サン	潸 産	諫カン 襇カン	黠カツ 鎋カツ
17行	先セン 仙セン [已上舌]	銑 獮 [已上舌]	霰 線 [已上舌]	屑セツ 薛セツ [已上舌]
18行	[喉内] 蕭セウ 宵セウ	[喉内] 篠 小	[喉内] 嘯 笑	
19行	肴カウ	巧	效	
20行	豪カウ	皓	号	
21行	歌カ 戈クワ	哿 果	箇 過	
22行	麻ハ	馬	禡	
23行	[喉内] 陽ヤウ 唐タウ	[喉内] 養 蕩	[喉内] 漾 宕	[喉内] 薬ヤク 鐸タク
24行	庚カウ 耕カウ 清セイ	梗 耿 静	敬 諍 勁	陌ハク 麥ハク 昔セキ
25行	青セイ	迥ケイ	径ケイ	
26行	蒸ショウ 登トウ	拯 等	證 嶝	職シヨク 徳トク
27行	尤 侯 幽	有 厚 黝	宥 候 幼	
28行	[脣内] 侵シム	[脣内] 寢シム	[脣内] 沁シム	[脣内] 緝シフ
29行	覃 談タム	感カム 敢カム	勘カム 闞カム	合 盍

「綱（永正）」
（永正本をもとに龍大・寛元本で補正）

[喉内] 平	[喉内] 上	[喉内] 去	[喉内] 入
東トウ	董トウ	送ソウ	屋ヲク
冬トウ 鍾シヨウ	腫シヨウ	宋ソウ 用シヨウ， ヨウ	沃ヲク 燭シヨク
江カウ [已上喉]	講カウ [已上喉]	絳カウ [已上喉]	覚カク [已上喉]
支シ 脂シ 之シ	紙 旨 止	寘 至 志	
微ヒ	尾	未	
魚キヨ	語	御	
虞ク 模ホ	麌 姥	遇 暮	
齊セイ	薺	霽 祭セイ	
佳カ， ケイ 皆カイ	解 駭	泰タイ 卦カイ 怪クワイ， カイ 夬カイ	
灰クワイ 咍タイ	賄クワイ 海カイ	隊タイ 代タイ 廃ハイ	
[舌内] 真シン 諄シユン 臻シン	[舌内] 軫シユン 準シユン， シン	[舌内] 震シン 稕シユン	[舌内] 質シツ 術シツ 櫛シツ
文フン	吻	問	物フツ
殷， 欣キンイ	隱イン	焮キン	迄キツ
元クエン 魂コン 痕コン	阮 混 很	願 慁 恨	月クエツ 没ホツ
寒カン 桓クワン	旱 緩	翰 換	曷カツ 末ハツ
刪サン 山サン	潸 産	諫カン 襇カン	黠カツ 鎋カツ
先セン 仙セン [已上舌]	銑 獮 [已上舌]	霰 線 [已上舌]	屑セツ 薛セツ [已上舌]
[喉内] 蕭セウ 宵セウ	[喉内] 篠 小	[喉内] 嘯 笑	
肴カウ	巧	效	
豪カウ	皓	号	
歌カ 戈クワ	哿 果	箇 過	
麻ハ	馬	禡	
[喉内] 陽ヤウ 唐タウ	[喉内] 養 蕩	[喉内] 漾 宕	[喉内] 薬ヤク 鐸タク
庚カウ 耕カウ 清セイ	梗 耿 静	敬カウ 諍サウ 勁ケイ	陌ハク 麥ハク 昔セキ
青セイ	迥ケイ	径ケイ	錫
蒸ショウ 登トウ	拯 等	證 嶝	職シヨク 徳トク
尤イウ 侯コウ 幽イウ	有 厚 黝	宥 候 幼	
[脣内] 侵シム	[脣内] 寢シム	[脣内] 沁シム	[脣内] 緝シフ
覃タム 談タム	感カム 敢カム	勘カム 闞カム	合カフ 盍カフ

30行	鹽エム 添テム	琰エム 忝テム 儼カム ［或］	豔エム 稊	葉エフ 帖テフ
31行	咸カム 銜カム	豏ケム 檻カム 范ハム ［或］	陷カム 鑑カム	洽カフ 狎カフ
32行	嚴ケム 凡ハム ［已上脣］	［已上脣］	釅ケム 梵ハム ［已上脣］	業ケフ 乏ハフ ［已上脣］
末尾				

鹽エム 添テム	琰エム 忝テム	豔エム 稊テム	葉エフ 帖テフ
咸カム 銜カム	豏ケム 檻カム	陷カム 鑑カム	洽カフ 狎カフ
嚴ケム 凡ハム ［已上脣内］	儼カム 范ハム ［已上脣内］	釅ケム 梵ハム ［已上脣内］	業ケフ 乏ハフ ［已上脣内］
空点三内 ウ喉 ン舌 ム脣		涅槃点三内 クキ喉 ツチ舌 フ脣	

（いとう・ともひろ　本学大学院博士後期課程）